

宝寿の風

第 6 号
発行者
宝寿院住職
田辺信雄
TEL 62-5739

宝寿院住職 田辺信雄

檀家のみなさまには、日頃より宝寿院ならびに宗門の護持発展のために、ご理解とご協力をいただきありがとうございます。

さて、法要等の際に、般若心経というお経を読経しますが、このお経に続いて、

「上來度んで摩訶般若波羅蜜多心経を誦す。集むる所の功德は、大恩教主本師釈迦牟尼仏、高祖承陽大師、太祖常濟大師、盡十方法界一切の三宝に回向し奉る。」

という回向文をお唱えしています。

この中にある高祖承陽大師というのは、曹洞宗の開祖であり、大本山永平寺を開山された道元禅師のことです。また、太祖常濟大師というのは、大本山総持寺を開山された螢山禅師のことです。

私たちの仏門では、このお二人を両祖とお呼びし、仏教の教えを説かれたお釈迦さまと併せて一仏両祖とお呼びしています。

不謹慎を顧みず、あえて簡単に言います

と、曹洞宗を開かれたのが道元禅師であり、その教えを全国に広めたのが螢山禅師です。

その螢山禅師の教えを正しく受け継ぎ

(相承・そうじょう)、更に宗門発展の盤

石な礎を築かれたのが、螢山禅師の一番弟子で、大本山総持寺第二代(二祖)の峨山禅師(がさんぜんじ)です。

峨山禅師は、建治二年(1276)に、能登国

羽咋郡瓜生田(現在の石川県河北郡津幡町

瓜生)でお生まれになりました。

父は岡部六弥太(源氏の出自)と言い、

母の出自は藤原氏と伝えられています。

峨山禅師は、この両親の愛情を一身に受

けて育ちました。

幼い頃から、「その才能は群を抜き、その清らかさは俗世を超えていた」と言われ

るように、賢い男の子だったようです。

十一歳にして地元の寺に入門し、その後

比叡山に入り天台の教えを学んだと伝えられています。二十四歳の時に比叡山を去り、

螢山禅師の下で修行され、二十六歳で悟りを開かれました。貞治五年(1366)に九十一

歳で亡くなられるまで、多くの弟子を育てられ、曹洞宗の教えを全国に広めました。

今年、この峨山禅師の六百五十回忌の

大遠忌にあたります。

当院では、この勝因にちなんで、十一月に、大本山永平寺と峨山禅師ゆかりの総持寺祖院や永光寺を参拝する北陸の旅を計画しています。檀信徒の皆さまのご参加を心よりお待ち申し上げます。合掌



大本山永平寺参拝記念写真 平成4年4月3日

平成二十七年年回表

一周忌	平成二十六年
三回忌	平成二十五年
七回忌	平成二十一年
十三回忌	平成十五年
十七回忌	平成十一年
二十三回忌	平成五年
二十五回忌	平成三年
二十七回忌	平成元年
三十三回忌	昭和五十八年
三十七回忌	昭和五十四年
四十三回忌	昭和四十八年
四十七回忌	昭和四十四年
五十回忌	昭和四十一年
百回忌	大正五年

※法要の申し込みはお早めにお願ひします

摩訶不思議なおはなし 第一話

それは今から二十二年ほど前の夏の夜のことでした。

その頃の私は、庫裡の二階で、エアコンは使わずに、窓を空けて網戸だけで寝ていました。午前二時頃、外でにぎやかな話し声が聞こえて目をさしました。私は、「こんな時間に誰？」という不快感を感じつつ庭を見渡しました。

すると、月明かりの中、水屋の周りに、五人ほどの女性がいるのが見えました。

着物姿のような女性たちは、その雰囲気から、楽しそうに会話しているように見えました。何を話しているか、さっぱり聞き取れません。

網戸を少し開け、息をひそめて、しばらくその様子を眺めていると、やがて、見られていることに気付かれてしまったのか、話し声はぱつと止んでしまいました。なおも見続けていると、女性たちの姿は徐々に薄れていき、ついには消えてしまいました。なぜか、怖いという気は全くしませんでした。まるでキツネにつままれたような不思議な感覚が残りました。

今ではあれは、あの世で仲良しの先祖霊たちが、できたばかりの新しい水屋を見に下界に降りてきて、よもやま話に花を咲かせていたのに違いないと思っています。

住職体験談

境内に毘沙門堂が完成

宝寿院境内に毘沙門天の石仏があります。この度毘沙門堂を建立しました。

毘沙門堂は昭和30年代頃までは、寄木戸字毘沙門にありましたが、老朽化していたこともあり、

解体されたまま今日に至りました。解体後半世紀以上の年月を経て、ようやく再建することができ安堵しています。詳しい由緒等につきましては裏面をご覧ください。



宝寿院檀徒総代・世話人

- 総代長 坂本新一
- 副総代長 小沼唯二 服部和悦
- 会計 三吉靖典
- 総代 根岸克安 清水康司 坂本昌司
- 坂本陽 峯崎寛 根岸政夫
- 世話人 坂本實男 坂本勝三